

郷土の民話を探して

第17期 歴史・郷土学部 B班



メンバー:

酒巻恵子	平野雅子	中間泰子	福田國臣	本田信子	佐々木洋子	佐藤かね子
------	------	------	------	------	-------	-------

平井永子	木村 誠	○島田多賀子	◎木村輝美	○加美町子	山田知才
------	------	--------	-------	-------	------

目次

1. はじめに
 - (1) テーマの選定理由
 - (2) 活動方針
 - (3) 活動記録
2. 民話の世界
 - (1) 民話の定義
 - (2) 民話の分類
 - ①昔話 ②伝説 ③世間話
3. 東松山市の民話資料
 - (1) 東松山市民話マップ
 - (2) 東松山市民話一覧
4. 各地区の民話紹介
 - (1) 大谷・市の川・松山地区
 - (2) 古凍・下野本・上唐子地区
 - (3) 岩殿・高坂地区
5. まとめ
 - (1) 総括の言葉
 - (2) ご指導・ご協力を頂いた方々
 - (3) 参考文献

1. はじめに

(1) テーマの選定理由

民話は、遠い昔の祖先の喜び、悲しみ、怒り、幸せ、神秘的なものへの憧れ、なにを恐れ、何に怯えたかなどを知る手がかりともなるものであり、私達一人ひとりの心の中に生き続けているものである。

親から子へ、子から孫へと、長い年月語り継がれて来たと言う事は、それが夢であり、信仰でもあり、土地の歴史、人情、風土にあったからではないかと思ひ、私達の郷土にはどんな民話が有るのか、テーマとして選んだ。

(2) 活動方針

- ①基本的には民話発生場所を訪問し、関係者との接触に努める。
- ②民話調査は主に大谷・市の川・松山地区、古凍・下野本・上唐子地区、岩殿・高坂地区等を歩き、各資料を集める。
- ③出前講座、図書館並びに関連施設等を活用して情報・資料を集める。
- ④課題研究B班のメンバー間の親睦を図りながら、課題研究活動を進めて行く。

(3) 活動記録

No	月日	活動内容	場所
1	1/9	2年生での課題研究について、事務局員の説明	講堂
2	1/23	テーマの選定及びグループ分けと各役割決定	研修1
3	2/13	講師依頼の打ち合わせ	和室
4	2/18	元・東松山市文化財専門調査委員会議長柳沢氏講義	講堂
5	3/6	課題研究の進め方の研修	談話室
6	3/13	民話調査箇所の打ち合わせ	研修1
7	3/20	民話調査箇所の候補選定	研修4
8	4/12	岩殿・高坂地区調査・見学	校外
9	4/26	大谷・市の川・松山地区調査・見学	校外
10	5/29	古凍・下野本・上唐子地区調査・見学	校外
11	6/2	岩殿地区調査・見学	校外
12	6/19	集合写真撮影と今後の方向性の検討	研修1
13	7/3	レポート構成内容検討(3グループに分かれて)	講堂
14	7/10	レポート資料内容検討①(3グループに分かれて)	研修1
15	7/19	早俣・高坂地区調査・見学	校外
16	7/24	レポート資料内容検討②及び大谷地区調査(撮影)	研1/校外
17	7/31	レポート資料作成開始①	研修1
18	8/7	レポート資料作成②	研修1
19	8/21	レポート資料完成・印刷及び全員で資料検討	研修1
20	9/4	レポート資料全員で誤字・脱字等検討	研修1
21	10/9	レポート資料全員で読み合わせ検討	講堂
22	11/13	レポート資料校正	研修1



2. 民話の世界

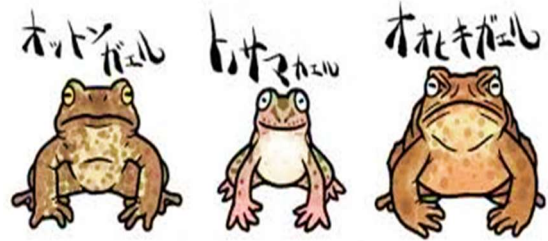
(1) 民話の定義

民話、民間説話は、民衆の生活の中から生まれ、民衆によって口承(口伝えで伝承)されてきた説話のこと。昔話のほか、伝説、世間話その他を含める。口承文学、また民俗資料の一つ、民譚(みんたん)ともいう。

民話は、本格昔話、動物譚、笑い話、形式譚の四類型を総括する名称として用いられる。日本に例をとれば、本格昔話は婚姻譚、致富(ちふ)譚、妖怪譚に大別される。



婚姻譚の主人公は異常誕生児が多く、致富譚は老夫婦が主人公となり、普通は子供がなく、後継者や富を待望する形式が少なくない。動物譚は単一挿話の話で、動物を行為者とした人間社会の葛藤を主題としたもので、呪術的信仰性はほとんどない。教訓的、道徳的色彩の強い動物寓話(ぐうわ)とほぼ同意語として用いられる。



笑い話も動物譚と同じく、原則として単一モチーフ(創作の動機となる題材・思想)の話である。

なかには複合挿話の物語もあるが、それは昔話、笑い話とも呼ばれる。内容が笑い話で、悪ふざけ、極端な愚行、無知な行為であり、昔話が婦人の物語と言われるのに対し、笑い話は男話(おとこばなし)とも言われる。江戸時代には小咄(こばなし)などと呼ばれ、中国説話などの影響で盛んになった。



形式譚は愚か者の愚行、単なる言葉の遊戯を主とする「だんだん話」などである。民話は原則として現在なお生きて語られているという特性をもち、過去においても同様な過程をとっていた。そのため相互にモチーフ、挿話の混交が見られる。その上同一内容の物語が伝説、昔話の名で呼ばれているものもある。



(2) 民話の分類

民話は、内容や形式によって、大きく「昔話」「伝説」「世間話」に分けられる。

民話の特徴

- ・語りの型—始まりと終わり・フレーズ感・合の手。
- ・結語の型—終わりの言葉は約 40 種類。
- ・物証・実在の地名や場所、信じられている。
- ・真実や事実ではなくても理解される。

① 昔話(むかし、むかしこ、むかしがたり)

「むかし」という確かでない時や「あるところに」という不明な場所を発端句として用い、本当にあったかどうかは知らないけれどという心持ちで語り継がれる話。

そのため、固有名詞を示さず、描写も最小限度にとどめ、話の信憑性に関する責任を回避した形で語られる。時代や場所をはっきり示さず、登場人物の名前も「爺」「婆」などのように性別や年齢などの特徴をもとにした普通名詞が多い。「桃太郎」も「桃から生まれた長男」の意味しか持たない。

「てっぺんぐらりん」、「どんとはれ」、「とっぴんぱらりのふう」等の言葉で終わることが多く、これを結句と呼称している。結句は地域によってそれぞれの言葉が用いられる。

昔話の語り口・特徴は、昔の人達が代々世々伝承して来た、語り物としてのお伽話(おとぎばなし)のことである。そのような昔話には、独自の語り方が存在する。その語り口・語り方の隅々、語りのすじ道の端々には、往古の先人たちの子供への思い入れが凝縮している。まず、語りの場において、昔話は一体どこに存在しているのか。

それは、語られている時間の間だけ実在しているものである。と言う事は即ち、昔話が語り終わられたら、それはその場から消失するということである。これは、昔話の形態が、時間的文芸であることによる。この事は同じく、演奏され終われば消える音楽と相似た関係にある。

さて、昔話の語り口について見ると、とても簡単で明瞭であることがわかる。そのようなわかりやすい文体であるのは、語り物であるからであり、そのような語り口によって語られるのが昔話なのである。そして、一通り昔話が語り終わられると、独特の定型的な結末句で終わるのが慣例となっている。この結末句は地方によって異なり、土地土地の結末句が伝えられている。

② 伝説(いいつたえ、いわれ)

人物、自然現象等にまつわる、ありきたりの日常茶飯事のものではない異常体験を、形式上「事実」として伝えた説話の一種。また、何をもって「伝説」とするかは、時代によって変遷している。日本国内



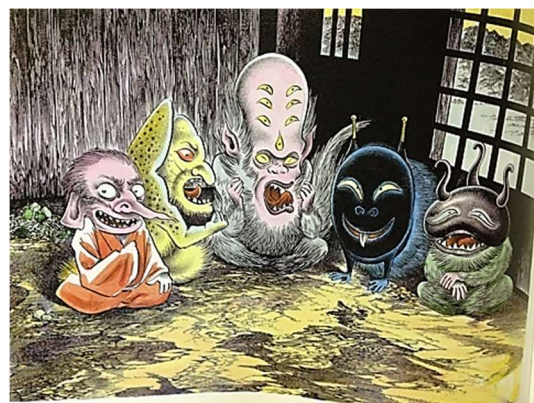
の「伝説」を語る時、世界一般的な「伝説」との観念のズレが生じることもある。ある特定の人物や時、場所と深く結びつき、少しは信じてほしいという心持ちを含んで、説明的に語り継がれる話。弘法大師や源義経など歴史上著名な人物が伝説の主人公となることも多い。古代の人物にまつわる時はしばしば神話と区別しがたい。

種類	内容
自然伝説	動物、植物、天体、気象、鉱物、地形、火、水などに関するもの。
歴史伝説	村、地名、屋敷、家系家筋、聖地、塚、建物、神仏、宝物、神体、偉業、事件、紛争、職能、芸能などに関するもの。
信仰伝説	(神)田の神、山の神、水の神、家の神、稲荷神、疫病神など。 (精霊)樹霊、岩石の霊、池淵の主など。 (靈魂)死霊、生霊、幽霊、人魂、妖怪変化、祭礼行事に関するもの。

③ 世間話

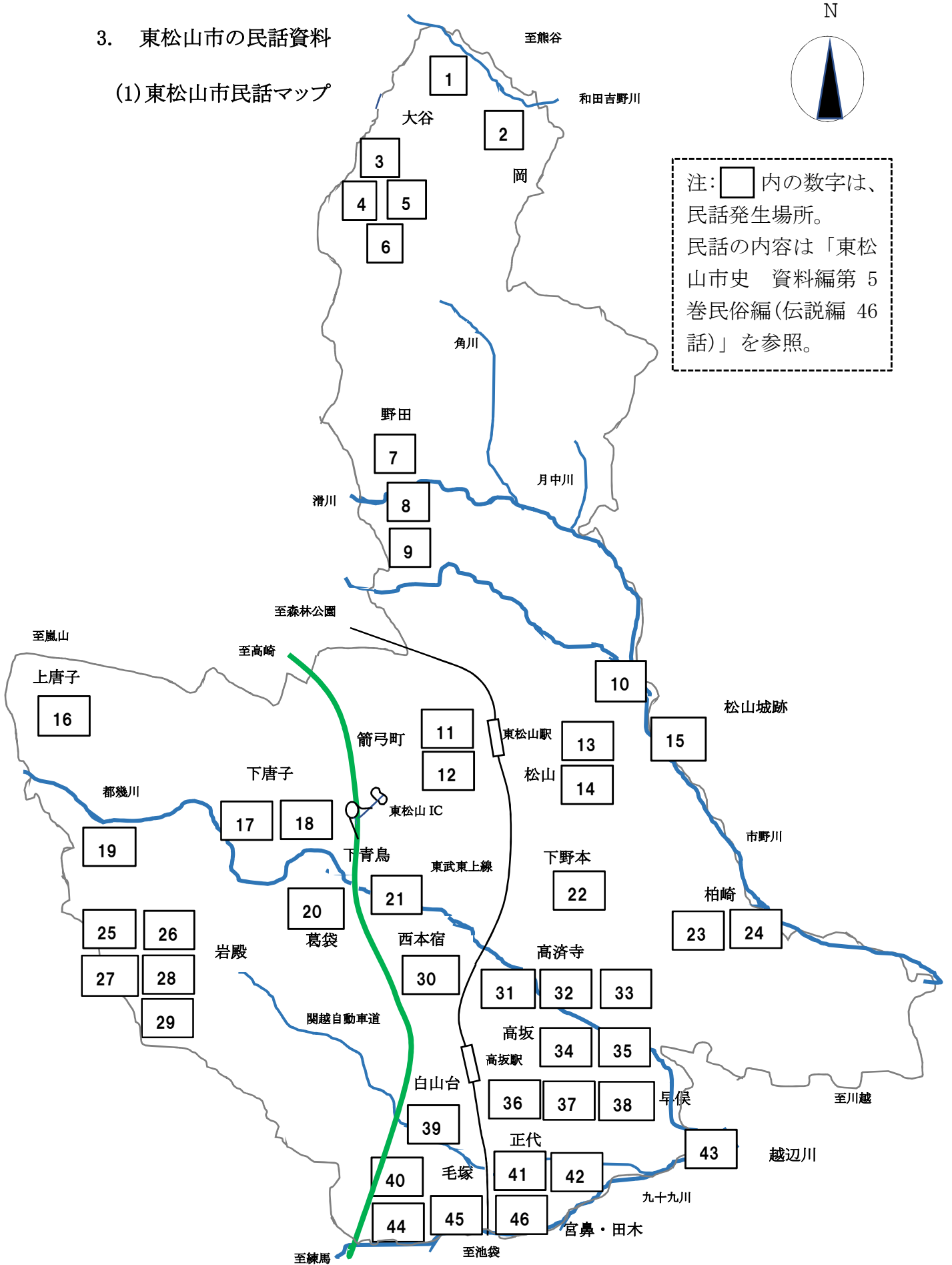
自らが主人公として狐や狸に化かされたと言う類の話。近隣の人や親族、親戚が主人公である場合もある。実話や体験談の形で語られる民話である。

種類	内容
人物に関する話	大力、大食、異常な能力や性格、成功者、失敗者の運不運、盗賊、犯罪者などの行為。
動物に関する話	狐、狸、狼、鹿、熊、蛇、犬、猫などの生態や習性、報復談、報恩談など。
天然現象	天災、人災、その他の災害、事件に関する話など。
怪異談	狐、狸に化かされた話、神威に会った話など。



3. 東松山市の民話資料

(1) 東松山市民話マップ



(2) 東松山市民話一覧

東松山市には「東松山市の伝説と夜話 上下巻」「高坂地区の伝説と夜話ⅠとⅡ」「野本村誌」「東松山史話」等の文献がある。互いに多少の重複があるが、今回は「東松山市史 資料編第5巻民俗編(伝説編)」を中心として取り上げた。

No	名称	場所	内容
1	おとうかつ火	和田吉野川	田植え時に高本の土手に青い蛍火が飛ぶという
2	徳利坂の由来	下岡(光福寺傍らの坂)	下岡の人が買物の帰りに酒を飲み、光福寺の近くの坂で徳利が転がる音に驚き家に逃げ帰った
3	雷電山の山姫様	大谷(雷電山)	山姫様の踊りが見たくて雷電山に登った若者が帰らなかったため、村中で探した所ガマガエルに裾を噛まれていた
4	若狭局と比企禅尼	大谷(串引沼)	頼家の妻若狭局が頼家からもらった櫛を思いを断ち切るために沼に投げ入れる
5	万五郎稲荷の狐に化かされた話	大谷(前川橋の稲荷)	万五郎稲荷の狐をからかった男が仕返しされ一晩中歩き通した
6	秋葉神社のご神徳	大谷(秋葉神社)	火事で屋敷近くまで火の手が迫ったが秋葉の祭神が大谷から飛んで来て屋敷を守った
7	河童地蔵	東平(野田)	東平野田の河童地蔵の近くに家を建てたものが死んだり火事になったりしたという
8	永福寺に伝えられた河童の詫び証文	市の川(永福寺)	河童が馬を川に引きずり込んだため村人が河童を痛めつけ、助ける代わりに坊主が証文を書かせる
9	くずるが橋のいわれ	市の川	永福寺の住職が松山芸者と恋仲となり、近道を造るため市の川に石橋を架けた
10	市の川の室戸岩のいわれ	市の川	室戸姫を速玉男命と味鋸高彦根尊で取り合い弓で勝負したため姫は市の川に身を投げた
11	箭弓神社銭絵馬(夫婦狐)の由来	箭弓稲荷神社	大工の男が流行目にかかり箭弓稲荷に願をかけ、治ったお礼に穴あき銭で作った夫婦狐額を奉納した
12	ざきっこ婆さん	松山(箭弓町)	やせ衰えた老婆が小川で小豆を研いでいた、この婆さんは箭弓稲荷の白狐の仮の姿だった
13	松山の女沼男沼の由来	松山(下沼・上沼)	夫が戦場から逃げて家に帰ったら母と新妻は下沼に身を投げていたので、夫も上沼に身を投げて死んでしまう

14	下沼の巡礼坂のいわれ	松山(下沼)	巡礼の母が、病となり娘が薬を買いに行き、戻って見ると母は死んでいたのので娘は旅に出る
15	松山城落城と龍の枕石	松山(市の川橋)	家臣の助命のため城主の娘が市の川に身を投げる、川は濁り姫は川の主、龍神となった
16	たたった蟹と蛇	上唐子	蟹や蛇をいじめると祟りが来るといふ
17	下唐子の夜泣き松	下唐子	行き倒れで亡くなった女が我が子のため毎晩飴を買いに来る、子供を思う母親の深い愛情
18	乞食谷のいわれ	下唐子	武田家の家臣が戦いに敗れ、母と弟の仇を討つため乞食に身をやつし、後に仇を討つ
19	落人穴の由来	神戸(鞍掛山)	曾我兄弟の五郎を殺した五郎丸も殺され、残党が鞍掛山の断崖に身を隠していたが見つかり殺された
20	弘法大師の願い井戸	葛袋	弘法大師空海が草むらに杖を突くと水が湧き出した
21	金谷の一本松の悲話	金谷(下青鳥)	名主の娘と小姓が一本松で逢引、小姓は京へ、娘と乳母は後を追って行くが金谷の里にはもどらなかった
22	利仁神社の枕石	下野本(将軍塚)	将軍塚の石を借りて来て袋に入れて帯に下げて置くと麻疹が軽くなるという
23	安曇昌成二本松経塚	柏崎旧道の二本松	野本の豪家安曇昌成が書いた大般若心経 600巻を埋め二本の松の木を植えた
24	等覚院の阿弥陀様の縁起	古凍(等覚院)	火災に遭った阿弥陀様が途中で動かなくなつて結局、等覚院へ行く事を希望した
25	田村麿将軍の悪龍退治	岩殿・鳴かすの池	坂上田村麿が悪龍退治。その頭を埋めた場所に後に池が出来、蛙が住みつかず鳴かすの池となった
26	岩殿山と比企能本	岩殿(正法寺)	正法寺に避難して来た比企時員の妻を匿うため寺の周囲のクツワ虫を取り除いた
27	岩殿観音の抜け絵馬	岩殿(正法寺)	正法寺に奉納された絵馬から抜けだした馬が故郷に戻つたという
28	蛇娘	岩殿(正法寺)	爺さんと婆さんに子供が無く、観音様に願をかけ満願の日に授かった女の子が後に大蛇となり、都幾川の主になった
29	雪女郎	岩殿(熊野神社)	寒い雪の夜戸を叩く音がするので、戸を開けると若い女が入って来た畳が濡れているので雪女だった
30	鈴木三郎重家と鈴留川	西本宿(仏性院閻魔堂)	鈴木重家が大雨で川を渡れなくなり、草庵に泊まり腹痛が癒えた後、笈を預けて旅立つ
31	高濟寺の蓮のお曼荼羅	高坂	大雨から救つた娘が織り上げた織物は大蛇が織つたものだった

32	高坂氏息女の 悲恋物語	高坂(大沼・ 小沼)	恋慕う仲を裂かれた二人は大沼・小沼に身を 投げてしまう
33	狐に化かされ た話	高坂(折本 山)	サイカチの木の根元で寝ていた狐に悪さをし た男が狐に仕返しされた
34	おさずけぬ沼 の話	高坂	旅の老人の言葉に従い、貧しい老婆が沼に鍋 を浮かべて願いをかけると、米を授かった
35	神かくしにあ った男の話	高坂(幡脚 塚)	鉦を池に落とした男が藍染めを教わり、後に 紺屋になった
36	八百比丘尼東 崎山に来る	正代(世明寿 寺)	漁夫の娘が人魚を食べ千歳の寿命を得た後、 尼となり武蔵国正代の世明寿寺に詣でた
37	大日堂の怪談	正代(折本 山)	青蓮寺裏山に住む綿くり娘に化けた古狐を退 治する
38	勝利地蔵と洪 水	早俣(光明 寺)	早俣村の洪水の中に光るもの(地蔵)が村人を 折本山に案内して助けた
39	白山神社の縁 起	西本宿	旅人が夢を見た後、笈ずるが動かないので社 を建て神体を納めた
40	黒髪塚の由来	毛塚	名主の娘は旅僧と契りを結ぶが、雲水は旅立 つ、娘は川に身を投げる。名主夫婦は哀れに思 い黒髪をまつりその上に塚を築く
41	お力さん	宮鼻	力持ちのお力さんの蔭口をした若者の髪を大 黒柱を持ち上げ挟んでしまった
42	だいらぼっち	高坂	関東一円に亘って巨人伝説が語り継がれてい る
43	越辺川若ヶ淵 の悲話	越辺川	名主の一人娘と魚取りの男、身分違いの叶わ ぬ恋に二人とも越辺川に身を投げた
44	袖曳坂の怪	高坂(大黒部 ～毛塚)	老人が坂を降りきった所で浪人に斬られて死 んでいたが、右手に黒の片袖を握っていた
45	ざる坂のいわ れ	毛塚	拾い集めた稲穂を入れたざるを背負った女房 を坂の所で足蹴りにして殺してしまった
46	本海上人の入 定談	田木	律義者の夫婦の元に生まれた子が本海上人と なり、入定する時の様子を述べている

4. 各地区の民話紹介

(1) 大谷・市の川・松山地区

【箭弓稲荷神社銭絵馬（めおと狐）の由来】

日本三大稲荷の一つで創建 1300 年以上の歴史のある古社、箭弓稲荷神社に「銭絵馬めおと狐」が伝えられ民話として残されている。

『江戸神田の小網町で暮らす定助は、代々大工の棟梁をしているがっちりした体格で江戸っ子肌の男、女房のお鈴は愛嬌者で、弟子達に実の母親のように慕われている似合いの夫婦だった。ある日、定助は業病で眼を患ってしまった。

「江戸で町医者に見放され青い目の和蘭陀医にかかっても治らねえ」「江戸中の神様・仏様にもお参りしたが治らねえ」「俺は奴盲目になっちゃうんだ」「もうだめだ」と定助の口からついつい愚痴がこぼれた。

武州松山の箭弓さまは、ご利益あらたかな神様と聞いて、定助夫婦は、はるばる江戸から来て二十日も泊り込み、お参籠をしていたが、夜昼の区別もつかないほど眼の状態は、一向に良くならなかった。

いよいよ満願の日、箭弓神社の拝殿に入り一心にお参籠に入った。闇の中に常夜灯のご神灯がポーっと明るい。二番鶏が鳴き、三番鶏が鳴いた。「お鈴！お鈴！明灯が明灯が！あかりだ！俺の眼は治った」「お稲荷さま、有難うございました」定助夫婦は人々に厚くお礼を述べると、駕籠で江戸へ飛んで帰っていった。

定助はお礼を兼ねて江戸中の社寺を回り、穴明銭集めを始め3年の歳月が流れた。

当時江戸で名高い絵師安東雪村に狐の絵を、江戸一番の飾師山畑源治に穴明銭で銅銭押立押込式の銭絵を依頼した。完成した二匹の狐の大絵馬を定助

夫婦は大八車に乗せ十四里の道を松山まで運び箭弓神社に奉納した。その夜は思い出の松屋旅館で、宮司を始め宿の主人から下男までを集めて、盛大な感謝の宴を開き心から厚く礼を述べたという。』

このように、箭弓神社に伝えられている「めおと狐の銭絵馬」は拝殿の南側の欄間に掲げられていたが、今は大事に保存されている。

その他、数多くの奉納絵馬も保存され、その中の8枚が市指定文化財として管理されている。

平成14(2002)年以来、県立松山女子高等学校の美術部が十二支の巨大絵馬を制作して奉納している。その年の絵柄を楽しみにしている参拝者も多いという。



箭弓稲荷神社



銭絵馬



巨大絵馬

【秋葉神社のご神徳】

『午後から吹き出した木枯らしは、夜になってから一層激しさを増し、大江戸の空を吹きまくっていた。風の音とともに半鐘の音が、数か所から交互に聞こえてくる。しばらくすると表の街の方が俄かに騒がしくなり、近くの半鐘がけたたましく鳴り出した。森川美濃守のお屋敷から遥か彼方に見えていた火の手が、あっという間に辺り一帯を火の海と化し、灼熱地獄絵さながらのようであった。

このままでは、美濃守のお屋敷も猛火に包まれると思いきや、逆に火の手は隣屋敷の方へとって返し静かになった。ふと見ると、隣屋敷との境の土塀の上に、なんと秋葉神社のご祭神火産霊命(ほむすびのみこと)のご神像が立っていた。何処の秋葉神社のご祭神かわからぬが、美濃守はご神像を床の間にお移しして厚くお礼を申し上げた。

一晩中荒れ狂った猛火は、本郷一帯を焼野原としたが、その焼野原に森川美濃守のお屋敷だけが焼け残り江戸中の話題となった。時に八代将軍徳川吉宗の享保 2(1717)年正月 22 日のことであった。



秋葉神社

江戸本郷の大火は、直ぐに大谷村の森川美濃守の陣屋に伝わり、留守居役は名主達を伴って急ぎ江戸へ旅立った。火事見舞いをした後、奥座敷の床の間に飾ってある秋葉神社のご神像を見て、大谷の秋葉神社のご神像にそっくりであることに驚いた。早速、村に立ち帰り、村の秋葉神社の本殿を調べてみると、ご神像は無く台座だけが残っていた。さては我が村

の鎮守の秋葉さまが、江戸まで飛んでいってお屋敷をお守り下さったのだ。そのことを美濃守に言上すると、美濃守も涙を流してお喜びになった。その後、享保 15 年になって、美濃守は大谷村の秋葉神社の社殿を、火災から屋敷を守ってくれた御礼として立派に改築され、毎年の例祭には米壺俵を長きに亘り寄進されたという。』

秋葉神社は、日本全国に点在する神社であり、現在は、神社本庁傘下だけで約 400 あるといわれている。享保の時代における秋葉神社の数は定かでないが、神頼みとして多くの神社が存在していたのではないかと思われる。神社以外にも秋葉山として、祠や寺院の中に祀られている場合もあるが、殆どの祭神は火防(ひよけ)・火伏せの神として広く信仰された秋葉大権現である。

森川氏は徳川の家臣で、天正 18(1590)年に家康が関東へ移封されると、森川氏俊は大谷村の他、山田村(滑川町)・杉山村(嵐山町)など 2200 石を領し、天正 20(1592)年この大谷村に陣屋を築いた。

大谷村の秋葉神社は、森川金右衛門が万治元(1658)年に勧進した神社で、その近くには森川氏の菩提寺である宗悟寺があり、ここに累代の墓がある。



森川氏累代の墓

【河童の詫び証文】【くずるが橋のいわれ】

市の川の弁天橋近くに曹洞宗・萬勝山・永福寺という寺があり、そこには河童の詫び証文が伝えられ、民話として残されている。

『市の川あたりから「おーい助けてくれえ」と叫ぶ声が聞こえてきた。付近の田んぼで働いていた百姓衆が、何事かと飛んで行ってみると、弥平爺さんの馬が川の深い方へと後ずさりしていた。四、五人が力を合わせ、やっとの思いで馬を引き出してみると、あの醜い姿の河童が馬の後ろ脚にしがみついていた。

百姓衆が河童を懲らしめていると、通りかかった永福寺の住職が止めに入り事情を聞いた。「それは河童も良くないぞ、謝りなさい。」という河童もすっかり参って「申し訳ございません。これに懲りて今後一切、人間様にいたずらをしないと詫び証文を一札入れます。」と詫びるので、百姓衆も許してやることになった。詫び証文を書くため、住職は河童を連れて寺へ帰った。



永福寺

「和尚さまに危ないところを助けて頂いたので、何かお寺さんで困っていることがあったら、ご恩返しに何かさせて下さい。」「さて、この寺で困ることといえば、水くらいのものじゃな。」「わかりました。」詫び証文を書き終えると、住職と河童は表へ出た。「和尚さま、この辺でいかがでしょうか。」「よかろう。」というが早いか、河童の姿は草むらに消えてしまった。

しばらくすると、出ていた、水が。しかも渾こんと水晶のような水が。「ややア、泉じゃ泉じゃ、これは驚いた。河童殿有難う、有難う。」この泉はそれ以来、いかなる日照りの年にも、水枯れしたことがないという。』

このように、永福寺に伝えられている「河童の詫び証文」であるが、民話としては永く残されているものの、詫び証文そのものは残念ながら見当たらないという。又、河童が命を助けてくれた恩返しとして掘り当てた泉は、本堂の脇にあり、現在も水を絶やさず流れている。



河童が掘り当てた

もう一つ永福寺にまつわる話として「くずるが橋のいわれ」という民話も残されている。『僧侶にあるまじき色好みの住職が、松山の「くずる」という名の芸者と恋仲になり、足繁く通うようになった。住職は近道をするため市の川に石橋を架け、くずるの元へせっせと通った。そこでこの里の人達は、その橋を誰いうとなく「くずるが橋」と呼ぶようになったという。』

永福寺には東松山市指定文化財として保存している「制札」がある。制札とは、ある行為を禁止するなどの決まり事を広く知らせるため、当時の権力者が木札に書いて、寺社の門前や村落の入口などに掲げたものである。保存している永福寺の制札は、北条氏が寺を保護するため、天文 22 (1553) 年 4 月に掲げたもので、これにより、当時の東松山市域は、北条氏の支配下にあったことがわかる。

(2) 古凍・下野本・上唐子地区

【等覚院の阿弥陀様の縁起】

『野本村大字古凍には、阿弥陀堂と称する草庵があった。何時の頃か災いにあって炎上した時、村民大挙して本尊阿弥陀如来の御尊像を安全地帯である附近の田の中に一時安置し火防に努めたという。

今も、当時安置したといい伝える所を釜穴(かまあな)と称し、広さ2坪余りの泉となっている。この泉こそ同村根岸沼と通じ如何なる旱魃(かんばつ)続きにても、涸渴(こかつ)したることがないという。一時たりとも火難を避けるために、御尊体を安置した功德なりという。今でも附近一帯の沼地に生ずる魚類や田螺(たにし)までも恐れて食べないという。



国宝阿弥陀如来坐像

火難の翌日やむ無く本尊を一時類寺なる慈雲寺に安置するため、車を持って送る途中、他の一寺等覚院へ分ける道に来た所、不思議にも車上の御尊体が急に大磐石の如く、如何にしても動かないので村民思うに、阿弥陀如来、慈雲寺へ移すことを喜ばず、等覚院を好んだため、試しに車を西向きに運び始めた所、不思議な事に尊像にわかに軽やかに動いたという。故に、村民これ等覚院へ安置したという。』

口碑によれば、当地内釜穴と称せられる湧水池より出現したものと伝えられるが、古凍と呼ばれているこの地が「古郡」とも記されて平安時代におけるこの地方の土豪の郡司の館の所在地と推定されるところからその郡司の持仏堂の本尊であったかも知れない。

因みに、慈雲山・等覚院・来迎寺は天台宗の寺院で、阿弥陀如来坐像は昭和3年8月に文部省より国宝の指定あり、更に昭和25年8月には重要文化財の指定を受けた。

又、像内には銘文があり、鎌倉中期の建長5(1253)年に定性が修理したという。この定性は、滑川町泉福寺の阿弥陀三尊像を1254年に修理した同一人物と考えられている。この地域で活動した地方仏師の一人と想定される。

尚、等覚院の仏像に関しての記述には、「野本村誌」の中に「国宝阿弥陀如来の伝説」として記載されており、地元の人に聞いた話「釜穴から出て来た仏像」と内容はほぼ同じである。又、「東松山市の伝説と夜話(下巻)」の中に「流れて来た阿弥陀様」が記載されているが、野本村誌等とは異なったものとなっている。



等覚院

【利仁神社の枕石】

野本将軍塚は将軍山とも称して野本小学校の南側にある。瓢箪(ひょうたん)型の高い丘で前方後円墳である。

この丘上に藤原利仁を祀る利仁神社がある。『今より溯ること、即ち延喜 15(915)年藤原利仁、武蔵守に任じられ、野本村古凍に居住する。勅命により、下野の賊徒を討伐して、この地を治め人民の尊敬深く、延長元(923)年没するに及び住民慕う事益々深く、この地に塚を立てて将軍塚という。利仁神社



利仁神社

延長 5 年後醍醐天皇が麻疹(はしか)に悩み、利仁社に病氣平癒祈願を行う。延長 6 年後醍醐天皇は麻疹平癒し、野本村利仁社に利仁大権現の勅称を賜うとある。明治維新以後分離して利仁神社と公称し下野本の鎮守となる。因みに無量寿寺は太古野本(やほん)寺といい、利仁山と称し、利仁の古墳として建立したるものといわれ、一説に利仁武蔵守として赴任当時の宿にしたともいわれているが、その辺あきらかならず。

尚、無量寿寺縁起によれば、藤原利仁がこの地に陣を敷いた時、急に麻疹を発し陣中のことで念珠なく小石を集めてその代わりと為し、無量寿寺阿弥陀様の名号を唱え、日夜念じた所、たちどころに本復したという。

利仁大いに喜び「我も小石のあらん限り末世までもこれを念ずる者は救わん」といったという。後、朝廷の尊信を受け、その事天下に知られる所となった。故に今でも守護の小石を拝借し治った際には、祭壇に石を増して奉納するという。』

また、野本村誌に「下野本は陸稲を作らず」という話がある。これは利仁将軍が賊を征伐する時、陸稲畑で陸稲につまずいてころんで、陸稲の穂先で眼を突いて片目を潰してしまった。由来、悪い賊を征伐して下さった、利仁将軍のご恩を永く子々孫々まで忘れないようにと、陸稲を下野本では作らなくなったという。



無量寿寺



陸稲

(3) 岩殿・高坂地区

【田村麿將軍の悪龍退治】

『今から 1200 年ほど前、比企の山には悪い龍が棲んでいて、村人を苦しめていた。

ある年のこと、東征のため兵を率いて通りかかった坂上田村麿がこの話を聞いて「その龍を退治しよう」と申し出た。しかし、龍はどこに潜んでいるのか、一向に姿を現さなかったため、田村麿は岩殿山に登り、観世音に 17 夜祈った。すると、夢に現れた僧が「明日から 6 月になるが、大雪になる。一箇所だけ雪が積もらない所があるから、そこへ行きなさい」と教えてくれた。

その通り、次の日は 6 月だというのに、朝から大雪になりました。急な寒さのために、村人たちは麦藁(むぎわら)を持ち寄り、火を焚き、田村麿には「小麦まんじゅう」を作って食べさせた。

そして、田村麿たちが山に登って四方を見渡すと、北方に確かに雪の無い所があって、たちまち龍を見つ出し、退治することができた。

因みに、この悪龍の頭を埋めた所に、天正年間岩殿山中興の開山英俊が、この地方の村人のために用水池を掘ってくださった。ところが、不思議なことにこの用水池には蛙が住みつかないので、蛙の鳴かない池「鳴かぬの池」と呼ばれるようになった。』

こうしたことから、比企郡から入間郡にかかる地域では、將軍による悪龍退治のご恩を永く忘れないようにと、毎年、旧暦の 6 月 1 日か、7 月 1 日に、庭先で麦を燃やし「しりあぶり」をして、「小麦まんじゅう」を食べる行事が行われるようになったという。

岩殿山正法寺では、年中行事の一つとして「しりあぶり護摩修業」が山伏一行により、開運を願い大勢の人が集まり執り行われている。



悪龍



田村麿將軍



しりあぶり行事



護摩修業を行う山伏の姿をした僧侶

【大日堂の怪談】

『昔、正代の青蓮寺(しょうれんじ) の大日堂は、折本山の中程にあった。折本山には昔の人が防風林に植え、数百年たった老松が百数十本もあった。昼間は美しい松林だが、夜になれば真っ暗闇、とても寂しい所であった。

その大日堂に綿くり娘のお化けがでるといううわさがたって、日没後は通る人がいなくなった。

宮鼻に岩次郎さんという飛ぶ鳥も三羽に一羽は必ず射落とす弓の名人の青年が「よし俺が退治してやろう」と夜になるのを待ち大日堂に行ってみた。あたりは真っ暗闇、大日堂の庭に十七、八の娘が手拭を姉さんかぶりにし牡丹の花模様の着物に赤い紐のたすきをかけ、行灯の横に座って綿をつむいでいた。

岩次郎さんは娘の胸をめがけ矢を放った。矢は娘の胸板を射抜いたが娘は顔を上げにっこり笑った。次の夜も大日堂に行き昨夜と同様娘の胸板を射抜いたがあざ笑うように、にっこり笑って消えてしまった。三日目、岩次郎さんは村の鎮守の八幡様に「村人の難儀を救うため妖怪を退治させ給え」と祈りをささげると「行灯を射よ」と耳元でささやく声、これぞ八幡様のお告げと十分に弓を引きしぼり行灯めがけて矢を放った。矢はみごとに行灯に突き刺さり「ギャー」と物凄い獣の叫び声が出たと思うと、若い娘も綿くり機も行灯も一瞬にしてすべて消え、何やらガサガサと大日堂の浦藪に逃げ込んでいった。翌日、村人は折本山から遠く離れた高坂の高済寺の裏山に、大きな古狐が胸板を射抜かれ矢をつけたまま朱に染まって死んでいるのを見つけた。

狐の死骸は大日堂の裏山に埋め、塚の上に一本の松の木を植えてやったという。』

青蓮寺は現在、正代にあり埼玉県文化財に指定されている板石塔婆は、当地の小代氏一族が弘安4(1281)年力を合わせ建立したもので、もとは高坂大地の北端大日山(現折本緑地)あたりにあったと伝えられている。

青蓮寺の檀家の方が60数年前の子供の頃、薄暗くなった湿っぽい夕方に、九十九川の土手の上にぼんやりと提灯行列のような無数の灯りを見て、これは「狐の嫁入り」に違いないと思われたそうだ。



埼玉県文化財板石塔婆



狐の嫁入り

【神隠しにあった男の話】

『高坂宿の中程に通称「紺屋（こうや）」と呼ばれる家に、親孝行な息子がいた。

ある年、団子正月用の団子木をとりに幟脚塚（はたしづか）の蛭藻が池（ひるもがいけ）に行った。息子は団子木によじ登り、枝を切ろうとして鉈を振り下ろしたところ、鉈があつという間に池に落ちてしまった。息子は我を忘れて池に飛び込み鉈を追って行ったが、力尽き気を失ってしまった。

耳元でささやき交わす人声に我に返ると、そこは池の底と思いきや空には日の光が照り輝き、花の咲き乱れた草原であった。美しいお姫様が腰元を従え介抱してくれていたのだった。誘われるままお姫様のお屋敷について行くと、大きな構えのお屋敷で、広い台所には何十という藍瓶がいけてあり、大勢の男たちが糸や布を染め上げていた。



藍瓶

息子は手厚いもてなしを受けて、勧められるまま藍染の手伝いをしながら三日間を過ごしてしまった。

孝心深い息子はふと両親の事を思いだし、さぞかし心配しているだろうと思い、矢も楯もたまらずお姫様に両親の元へ帰して下さいと頼んだ。するとお姫様は落した鉈を返してくれて、目をつむって真直ぐに歩いて行きなさい。そうすれば故郷へ帰れると教えられ、その通りに歩いて行くと、急に襟元が寒くなったのでそっと目を開けて見ると、なんとそこは蛭藻が池の端であった。

息子が飛ぶようにして家に帰ってみると、家の人達は団子木を取りに行ったまま行方知れずになり、三年の月日が過ぎたので最早帰らぬものと思ひ葬式を出す所だったが息子が無事帰ったので祝宴となり、息子の習い覚えた藍染の紺屋になったという。』



藍染糸



藍染布

※ 高坂宿の「紺屋」は高坂二番町に実在する藤野家で今でも「紺屋（こうや）」と呼ばれている。

※ 団子木を採りに行った沼、蛭藻が池は早俣の田圃（今はピオニウオークの東駐車場あたりか）と連想されている。

【勝利地蔵と洪水】

『「土手がきれるぞう。早く逃げろ。光りものを目当てに、逃げるだぞう。」という声が、この世の終わりかと思うような物凄い雨と風の音に、絶え絶えに聞こえる。その叫びを聞いた村人達は、我先にと外に飛び出した。

外は真っ暗闇、しかも大暴風雨、今朝からの集中豪雨、面をあげることも出来ない。最早庭先まで膝を没する地水、道も田圃も一面泥海と化し、川のように流れている。

その泥海の中を、光りものが流れに逆らう様に村から9町程離れた折本山の台地に向かって流れて行く。光りものはあれだと村人達は一家族ずつ、先祖のお位牌と大事なものを風呂敷に包み、しっかり背負った主人を先頭に一本の荒縄をしっかりとつかみ合い、たった一つの光りものを頼りに逃れて行った。

村人たちが一同無事に逃れ、ほっと一息ついた瞬間だった。どどどーっというすさまじい音と共に、村の中程の地蔵堂あたりの土手が堰を切ったように決壊して、濁流が夜眼にも白く流れ込むのが見えた。村の人達が逃げるのが今一時遅れたら、村中がああ濁流に吞まれて押し流され、相当多勢の死人が出たことだったろうと思うと今更のようにぞっとした。早俣村の村人全体を救ってくれた光りものは、勇気ある甚兵衛爺さんが濁流の中から拾い上げた。光りものは、名主さまのお地蔵様でした。時に、寛保2(1742)年8月のことであった。』

鎌倉時代、早俣村に早河小四郎勝利という武士がいた。蒙古襲来に際し九州で輝かしい成果を上げた。年老いて早俣村に帰る途中鎌倉にて仏師から守り本尊の地蔵様を譲り受けて帰った。早俣の地ではお堂を建立し、自らも髪を落とし仏門に入って地蔵様にお仕えした。その年5月20日に眠るが如く大往生を遂げたという。

光明寺境内には勝利供養の板石塔婆があり、応長元(1311)年5月20日沙弥観仏帰寂とある。勝利地蔵も薬師如来と共に同じ建物内に安置されている。地蔵様は痛みがひどくなったので、新たに彫刻(錫杖は昔のものを用いている)し地蔵堂に収められている。

毎年10月23日には「奉納地蔵尊」の織旗を揚げ夕刻信者が団子を持って集まり縁日開扉供養が行われている。

「頼まずも誰か残さん老の船故里ちかく寄する白波」という和讃(多くは七五調五句で構成される)が伝えられている。



地蔵菩薩坐像



勝利板石塔婆

5. まとめ

(1) 総括の言葉

今回、私達の課題研究に際し、柳沢様(元・東松山市文化財専門調査委員会議長)、巖殿山正法寺中嶋様ご夫妻、新井様(東松山市観光ボランティアガイド)の皆様にはご多忙な時間の中、私達のために講義をはじめお話を聞かせて頂き、心より御礼申し上げます。特に、千代田様(青蓮寺檀家総代・きらめき市民大学講師)には私達の調査のために何回も御足労を頂きました。光明寺檀家総代の林様、並びに高橋様、関係各位のお寺様にもお世話になりました。この紙面をかりてB班一同心から感謝申し上げます。

課題研究を進めるにあたり私達B班は「情報は共有し、話し合いによって進めること」をモットーに取り組んでまいりました。

民話の講義を始め、図書館等で資料を集めながら、民話が起きた場所等へ行き、出来得る限り関係者と接触し、話を伺ったりして、情報の収集に努めました。

民話研究活動を通じて、当時の民衆の知恵、思いや願い、人間らしい生き方を学ぶことが出来ました。そこから見えて来たことは、先人たちの残した民話を伝えて行くことが大切であると思いました。

終わりに、今回私たちの課題研究が、民話伝承の一助となればこの上ない幸せです。

(2) ご指導・ご協力頂いた方々

元・東松山市文化財専門調査委員会議長	柳沢	功	様
巖殿山正法寺住職ご夫妻	中嶋	栄	様
	中嶋	友子	様
青蓮寺檀家総代・きらめき市民大学講師	千代田	恒之	様
東松山市観光ボランティアガイド	新井	美代	様

(3) 参考文献

民話の世界	松谷 みよ子
東松山市史 資料編第5巻民俗編	東松山市市史編算課編
東松山市の伝説と夜話(上下巻)	田村 宗順
東松山史話	東松山市文化財保護委員会
高坂地区の伝説と夜話(IとII)	田村 宗順・堀口 茂
野本村誌6話	第一部(郷土の歴史(3)口碑伝説)
新編武蔵風土記稿(比企郡)	
ウィキペディア(Wikipedia)フリー百科事典	